

「困った子」からひろがる笑顔の教育

－ 発達診断と生活教育実践における豊かな子ども理解

2008年6月15日(日) 10:00-16:00

場所 京都大学「総合研究2号館」(旧工学部4号館)の教育学部第二講義室

詳しい案内はこちら→ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/access.htm>

JR京都駅から市バス(206・17)で百万遍下車/京阪出町柳駅から東へ徒歩約10分

参加費 500円(予定・資料代など・小銭で準備いただければ幸いです)

事前申し込みは不要ですが、資料準備数の関係上、参加をメールでお知らせいただけるとたいへんありがたいです。

専用アドレスは、pre0615@nisseiren.jp です。

(1) 実践報告:「廊下の家」から「友だちのいる場所」へ—Kくんの発達をとらえて教育実践を再構成したM小学校 (田中真介 京都大学高等教育研究開発推進センター 発達研究者)

小学校の子どもたちが、教室から離れて自分の場所に引きこもるように見える行為をするといった場合に、そのような行為の意味をどうとらえ、どのような教育方法を組み立てていけばよいだろうか。児童期初期(7-8歳)の子どもたちを対象とする授業での発達観察・発達理解のポイントと、それに基づいた教育実践の事例を紹介する。その中で、小学2年生から3年生に至る子どもたちの発達の特徴、また、小中学校で生じやすい「引きこもり」への生活指導の発達の基礎についても併せて検討したい。

沖縄県の都市部にあるM小学校の協力で、小学2-3年生の1クラスの授業を継続して参観する機会を得た。2006年秋、2007年春、そしてそのクラスの子どもたちが3年生になった2007年秋の3回である。そのクラスの中に、登校はするものの授業にほとんど参加しないKくんがいた。彼は教室の外の廊下に、ロッカーや給食台を組み合わせて自分の「家」を作って、授業中はずっとその中に入って寝ころんで過ごしていた。教室に入らない子を認めるのには勇気がいる。学校は、新たな対応の方法と総合的な教育実践計画の創出を迫られることになった。その子の発達特徴の把握と行動観察に基づいて、新たに試みられた教育方法、そして具体的な言葉かけの例を紹介したい。

観察記録の共同討議のなかで、Kくんの廊下のロッカーハウス生活は、①自己の尊重と発達援助を求める願い、②この子が大好きな「ドラえもん」に出てくる「ドラえもんの家(デンデンハウス)」の再現なのではないか、③苦手なものから自分を守ってくれるシエルトの役割と機能をもったものの実現、といった見方が示された。Kくんのロッカー生活が、新しい子どもの観方の必要を提起し、発達と行動の意味への理解を助けることとなった。Kくんはその後、3年生になった春に少しずつ友だちの輪の中に戻り、みんなと一緒に学校生活を楽しむことができるようになった。

(2) 実践報告:誰にでもある学びどき—実感と仲間の中で変わる子どもたち

(渡辺恵津子 日生連研究部 埼玉小学校教師)

おそらく3年間、文を書くことはほとんどなかった子どもが、おもに《書く》ことから、自分に自信をもち、表現をはじめ、仲間にかかわっていく。それには、「すがたをかえる大豆」「ありのからだのつくり」「 $42 \div 9$ 」などの《授業という場》とそこでの仲間の支えがあった。その変化をいろいろな場面でどうだったのか、渡辺さんの報告。小3の実践『生活教育』2008年4月号pp.42-47。『こどもといっしょにたのしくさんすう小学1-3年 考える力を育てる学習法』(一声社)著者。

(3) 総合コメント:(服部敬子 京都府立大学公共政策学部福祉社会学科 発達研究者)

発達検査で読み取れる子どもの力とはどういうものか。発達検査などを通じて明らかになったことを手がかりに、発達上の困難さなどの原因を探り予後や手だてを説明する発達診断を教育実践にどう活かすか。

企画趣旨

軽度発達障害などの子どもを「困った子」としてではなく「困っている子」としてとらえる子ども理解は、さらに深まって、その子の持っている発達要求は普遍性を持つ（周りの子どももそうしたいと思えることを代表している場合もある）と見て、それはその集団を命輝く集団へと発展させる「世の光」なのではないかと発展してきた。その子どもの発達要求を活かして教育実践をダイナミックに展開していくことが、ほんとうにそうであるという現実をつくりだしつつある。

発達検査の場面も、小さくとも生活であり、生活教育の場である。検査者との人間関係があり、コミュニケーションがあり、協働して働きかける素材や道具がある。この小さな生活の中で読み取られる発達のちからをさらにどうその子どもの成長に活かしていくかの視点をもって、発達診断、発達相談、教育相談がおこなわれる。

それは、学校関係者の理解を得て、教育実践をダイナミックに変え、またそのことによって、子どもが大きく育つ姿が見られることになる。

今回、直接、その教室の子どもを発達検査、発達診断をしたのではないが、日頃発達診断などで培った《目》が、どう子ども理解を深め、さらに実践を変えていったのか、田中真介さんに語ってもらう。

また、教育実践者は発達検査などの専門技術はないが、教育実践の場がいわば大きな発達診断の場でもあるととらえてみれば、日々子どもの豊かな活動から子どもを理解していることになる。教師はそれを活かすべく刻々と教育実践を変え、発展させている。その中で子どもが変わり成長し出す。この姿を渡辺さんに報告してもらう。

これらの相互関係を、服部さんにコメントしてもらい、子ども理解、そして教育実践の発展のしかたについて深めたい。

生活教育実践と発達研究が本格的に出会う、日本教育実践史上画期的な日になることが期待できる。

日生連（日本生活教育連盟・にっせいれん）紹介

日生連は、日本国憲法・教育基本法が制定され、民主的で平和な日本・世界をつくろうという巨大なうねりの中、戦後新教育運動をになう民間教育団体として1948年10月30日、「コア・カリキュラム連盟」として発足しました。全国の多くの学校での自由で主体的な学校づくりをつなぐ団体として、一時は「民間文部省」とまでいわれるほどの活発な活動を展開しました。1953年、名称を現行の「日本生活教育連盟」に改称し、カリキュラムにとどまらず、思想的にはルソー、実践的にはペスタロッチに源流を求める、生活教育という大きな流れを意識した活動を展開しています。いわば「老舗」の民間教育団体で、今年創立60周年をむかえます。

日生連の実験校でもあった関係で、事務局を和光小学校にしています。機関誌は、月刊の『生活教育』（前身は『カリキュラム』）で、7月号で716号になります。ホームページ（ウェブページ）は <http://nisseiren.jp/> です。いろいろな企画のお知らせ、『生活教育』の購読申し込みなどにご利用ください。今回の企画案内も載せています。代表的な実践者には、金森俊朗、竹沢清など。

最近では、「豊かな子ども理解と学びの展開」「ともに生き、いのち輝く教育」などをモットーにした豊富な実践を『あっ！こんな教育もあるんだ学びの道を拓く総合学習』新評論、2006年7月（2200円＋税）にまとめています。

夏季全国研究集会も2008年で第60回。今年は京都で、8月1日から3日の日程でおこなわれます。詳細はホームページで。

